

研究テーマ 回復期病棟における騒音とは
～看護師と患者の騒音の認識の違い～

病院名 医療法人社団健育会 ねりま健育会病院

演 者 ○安池^{やすいけ}勇人(看護師) 草薙^{くさひ}樹(看護師) 高下^{たかした}祐希(看護師)
土屋^{つちや}光平(看護師) 佐藤^{さとう}裕太(看護師) 伊藤^{いとう}憲次(看護師)

概 要

【研究目的】
回復期病棟に入院する患者の属性によって騒音に対する感受性に違いがあるのか。また、回復期病棟の患者と看護師において騒音に対する感受性に違いがあるか明らかにする。

【研究方法】
対象者:期間内にA病棟に入院しており、調査日時点での入院期間が1週間以上で、研究概要を説明し本人が理解・同意を得られる患者。高度の難聴・認知機能低下のある患者は対象外。
期間:2023年5月～2023年8月、9時～17時
データ収集方法:先行研究より騒音項目を29項目抽出。騒音を録音、騒音計を用いて数値化。録音した音声を患者に聴いてもらい騒音と感ずるか調査した。加えて自由記述欄を設けた。
分析方法:患者属性で分類し、Mann-Whitney U検定(2群間)もしくはKruskal-Wallis検定(3群以上)を実施した。また、騒音の各項目に対して看護師群と患者群で χ^2 検定を行い、看護師と患者で騒音の感じ方に違いがあるか明らかにする。有意水準は $P<0.05$ とした。当研究はN病院の倫理委員会の承認を得て実施し、個人情報については匿名化して取り扱った。

【結果】
N=58。患者属性別で検定を行い、いずれの属性においても有意差はみられなかった。dBの大きさと騒音と感ずた人数の間に相関はなかった。患者と看護師間での騒音の感じ方について、看護師の方が有意に騒音と感ずる音が15種類あった。一方で、患者の方が騒音に感ずているものは9種類あったが、有意差はなかった。

【考察】
騒音の捉え方には患者の音への解釈や感受性が影響したと考える。患者は日中よりも夜間の方が騒音を感じやすい。看護師よりも患者が騒音と捉えにくい傾向の理由として、リハビリテーションや看護ケアにおける病棟の発生音を患者は日常生活音として受容していることが考えられる。患者が比較的騒音と感ずたものは生理的に不快と感ずやすい音だが、看護師はそれらを患者から得る情報として認識しており、捉え方の差が現れたとみられる。

【結論】
今回の研究では、患者の属性において、騒音を感じやすくなる有意差は見られなかった。dBが大きい音が必ずしも騒音として認識されるわけではない。日中においては看護師より患者が騒音と感ずないが、夜間においては騒音の感受性が高くなる。患者はリハビリテーションや看護ケアにおける発生音は日常生活音として捉え受容している。

【引用参考文献】
1)回復期病棟における騒音とは、日本看護研究学会、ねりま健育会病院 土屋, 前田, 清野 (2022).
2)Environmental Noise Guidelines for the European Regions, World Health Organization Regional Office for Europe (2018).